

【特集】人生・生活・社会の「幸福／well-being」を考える

—現代行動科学会第35回大会テーマセッションから—

テーマセッション

「人生・生活・社会の「幸福／well-being」を考える」の趣旨と成果

企画・司会 小野澤章子 (岩手大学)

1 テーマセッションの趣旨とパネリストの紹介

第35回現代行動科学会(2018年11月3日)において、テーマセッション「人生・生活・社会の「幸福／well-being(よい状態)」を考える」が開催された。現在さまざまな分野、領域で「幸福」が語られ、また、心理学等においては「well-being(ウェル・ビーイング)」に関する研究も進展しつつある。「幸福」とはそれぞれが人生で感じるものであると同時に、他者との関係のなかにあり、また社会で共有されるものであるかもしれない。いずれにせよこのような動きの背景には、生きにくい／見通しにくい現在への認識があるのではないだろうか。

本セッションの目的は、幸福の、いわば「最終型」の探求ではなく、参加者それぞれがこのセッションを通して改めて「幸福／well-being」について考える機会としたいということである。多様な世代、所属、立場で活動する本学会の会員の中から、本セッションに話題提供をくださったのは、久保優司氏(ふくしま中央森林組合)、高橋しのぶ氏(岩手県警察)、熊谷星臣氏(フリーライター)の3名である。3名の方には、これまでの生活史、そしていま大切に思っていること、well-being(よい状態)と考えることについて話題を提供していただいた。また、それに先立ち、竹村祥子氏(岩手大学)から、自治体施策の政策目標として「幸福」が取り上げられていることなど社会的な動向も含め「幸福」についての基調報告をお願いした。改めて、報告者そして参加者の皆さまのご協力に感謝申し上げます。

2 セッションの概要

基調報告、話題提供者の報告内容はそれぞれの記録を参照していただきたい。それらを通して見えてきたポイントのひとつは、広い意味での「仕事」の役割であった。社会のなかで一定の役割を果たし対価を得るという意味の狭義の職業はもとより、「よい状態」を他者と共有する社会的な活動は今後さらに重要度を増すと考えられる。また、フロアからのコメントにもあったように、家族や地域社会あるいは職業などさまざまな文脈で他者につながること(そしてつながらないこと、選択すること)が、自分の居場所を作り出すことになる。これらの議論を通して、主体的、能動的に幸福／well-being(よい状態)へむかっていく部分と、人生のなかで「自然にいきつく」ことによって得られる部分と、それぞれに役割があることが示唆されたように思う。

討議時間の最初に会場から指摘があったように、幸福を可能にする社会的、基盤的な要件(例えば経済的豊かさ)についても十分に目配りしつつ、それぞれが人生・生活・社会の幸福／well-being(よい状態)とはなにかを考え続けることが求められている。